

《特集 北東アジアにおける「読み換え」の可能性》

本 特 集 に つ い て

李 曉 東

一

本特集は、2008年9月14日に中国杭州で開催された国際シンポジウム『近代北東アジアの啓蒙思想』の成果である。本学の北東アジア地域学術交流事業の助成を受けて、共同研究プロジェクト「北東アジアにおける『読み換え』の可能性 日・中・韓「伝統」知識人をめぐる比較研究」（代表：李曉東准教授）は、中国浙江樹人大学東亜研究所の副所長、中国における日本哲学研究の大家である卞崇道教授のご協力を得て、本学の北東アジア研究科科長飯田泰三教授をはじめ、井上厚史教授、渡辺望教授、李曉東准教授、于臣北東アジア地域研究センター客員研究員、一行五人が中国に赴き、浙江樹人大学東亜研究所との共催でシンポジウムを開催して、中国における日本思想史研究の気鋭学者と学術交流を行った。本特集の八編の論文はすべてこのシンポジウムのために執筆されたものである。

2007年度に発足した上記の共同研究プロジェクトは、本学の従来の共同研究プロジェクト「西周と東西思想の出会い」（代表：故鈴木登名誉教授、村井洋教授）の研究成果を受け継ぎつつ、西周と同時代の日本の啓蒙思想家の思想を近代の北東アジアというより大きな枠のなかで見つめ直して、さらに同時代の中国や韓国の知識人を含む北東アジア知識人の間の思想的連鎖を考察しようとしたものである。この特集は本共同研究が取り組んできた成果の一部である。

二

本共同研究は、北東アジアにおける多様な伝統に目を配りつつ、儒教という共通した伝統をベースにして、19世紀末期の東アジアにおける近代の中、日、韓諸国の知識人たちがどのように儒教を中心とした伝統を生かしながら「近代」を受容し、また、「近代」を借りて儒教思想をはじめとした伝統を読み換えたかを考察しようとするものである。このような北東アジアの知識人たちの「近代」と「伝統」とに対する「読み換え」を考察することによって、「近代」と伝統に対する知識人たちの理解の仕方を明らかにし、彼らの「読み換え」のなかにもどのような「近代」いうまでもなく、それは西洋の「近代」と異なった性格をもつものだが の可能性をもつかについて考えたい。

本研究が注目している「読み換え」は、丸山眞男が幕末の儒学者横井小楠と佐久間象山

の思想を考察するとき初めて概念化したものである。松沢弘陽が述べているように、丸山によって概念化された「読み換え」とは、例えば、小楠や象山が「所与の同時代に支配的な『伝統的な範疇や概念装置』『価値尺度』を大胆に再解釈することによって『活用』し、それをクッションとして、西欧国家体系や近代西欧の経験科学を理解し、その受容を正当化する」という思考方法である¹。丸山の「読み換え」論は、後に、さらに儒教に対するとらえ方のなかで展開することになる（本特集筆者の論文を参照）。

本研究は丸山の「読み換え」論からヒントを受けつつ、このような「読み換え」は、伝統に対する「再解釈」という一方向に止まらず、同時に、西欧の「近代」に対する理解や、翻訳の過程で生じた「読み換え」をも重視して、いわば、双方向で「読み換え」をとらえたい。その場合、伝統的な概念や価値は、「近代」を受容するための「クッション」の役割を果たすだけでなく、同時に「近代」を新しい視点から見つめ直すきっかけになると思われる。

さらに、以上のような双方向の「読み換え」を日本にとどまらず、同じ儒教的教養の背景をもつ北東アジア諸国の伝統知識人を視野に入れて、知識人たちが未曾有の「西洋の衝撃」のなかで、それぞれどのような「読み換え」を行ったかについて考察したい。

「西洋の衝撃」は近代の北東アジアにとって両面的な性格をもっている。一方、たとえば日本と中国との「開国」によって象徴されているように、両国はいずれも西洋の軍事力に屈した形でそれまでの鎖国政策の放棄を余儀なくされた。この場合、北東アジアの国々は「近代」の被害者であった。しかし、他方、弱肉強食という世界観が「西洋の衝撃」によって北東アジアの人々のなかに植えつけられたあと、西洋に倣って近代的国家を建設しなければ、自分たちの生存が脅かされるという観念が北東アジア諸国における「富強」の主張や政策に繋がった。このように、「西洋の衝撃」は、はじめから北東アジア諸国にとって、抵抗すべき対象と模倣の対象という両義的な性格をもっていた。そのことは、たとえば、中江兆民の『三酔人経綸問答』に見られる「豪傑君」と「洋学紳士」との間での迷いや、或いは、近代中国の啓蒙思想の最先端に立っていた嚴復や梁啓超が、第一次世界大戦後、相次いで近代西欧に対して幻滅した、などのことから伺える。さらに、例えば福沢諭吉の思想に見られるように、知識人たちにとって、西洋の「近代」は追求しなければならぬ目標であったが、その追求は同時に自国の「富強」のための手段でもあった。

以上のような北東アジアにとっての「西洋の衝撃」が有した両義的な性格は、逆に言えば、北東アジアの知識人は、西洋の「近代」を絶対的な価値として受容したのではなく、はじめからそれを相対化する視点を有していたことを意味している。このような性格は、非西洋の立場から「近代」を見つめなおす重要なきっかけになる。

近代北東アジアにおける中・日・韓各国は、中華文化圏に属し、或いはその強い影響下にあり、儒教思想という共通した伝統をもっていた。いうまでもなく、儒教的価値に対する理解の仕方をはじめ、儒教のあり方は、中国と日本と韓国とではバラエティに富んでい

る。しかし、他方、「西洋の衝撃」のなかで、中・日・韓各国の知識人たちが「近代」を受容するに当たって、このバラエティに富んだ儒教思想は、彼らが「近代」を受容するための欠かせない重要な手段であったこともまた共通した特徴であった。「近代」を理解するために儒教という参照のための軸が必要だったし、近代の思想文化を翻訳して本国の人々に紹介するために、やはり儒教思想の概念装置が必要だったからである。

共同研究の目的は、中・日・韓三国の伝統的知識人が西洋の「近代」を受容するとき、どのように自分たちの儒教的教養に基づきながら「近代」を理解し、紹介したか、また、どのように「近代」を借りて、それぞれのなかの儒教思想を読み換えて再解釈したか、を比較してそれぞれの特徴を明らかにすることである。国を超えた意味での北東アジアにおける知識人の儒教伝統に対する異なった理解、それから、そのことによって生じた「近代」に対する異なった理解、さらに、それぞれの「伝統」に対する異なった近代的「読み換え」、を明らかにすることは、北東アジアにおける「近代」のあり方を考えるのに重要な意味を持つと言ってよい。

もし「近代」はひとつの「未完のプロジェクト」であれば、いかに非西洋世界の思想的資源を生かしつつ、より中身の豊かな「近代」を創出することが可能かを考えるとき、近代北東アジア知識人の「読み換え」という知的営為が現代の私たちに非常に重要な示唆を与えてくれるだろう。

以上のような問題意識は本特集の執筆者たちによって認識されている。ただ、当然のことながら、「読み換え」に対する理解は論者によって異なっている。しかし、それぞれの理解に見られる相違は、まだ探索途上にある「読み換え」論を深めていくための重要な糧になると信じている。

注

- 1) 松沢弘陽「丸山眞男における近・現代批判と伝統の問題」大隅和雄・平石直昭編『思想家丸山眞男論』ベリカン社、2002年、325-326頁。

(LI Xiaodong)